



# 季節の作業

十二月



今年もいよいよ最後の月を迎えた。春から丹精した果実の収穫も終り、生産者の方々はヤレヤレと一息入れられた事であろう。しかし寒冷地のりんごは前にも述べたようによく貯蔵に耐える。従つて貯蔵庫に入れた果実の管理や市場価と睨み合せての出荷が重要な作業として残っている。また、十一月から十二月にかけては労力の余裕を土壤改良に仕向ける好期でもある。

## 貯蔵果実の管理

前回述べた様に果実の貯蔵力、貯蔵中の生理障害の発生等は、貯蔵中の温度(〇度C 前後で、フレのないのがよい)、湿度(八五〜九〇%位がよい)に影響されることとが大きい。従つて常時庫内の状態に注意し、果実の呼吸作用で気温が上つている(入庫当時は呼吸がはげしいので高温になり易い)場合は、直ちに換気を図つて温度を下げねばならない。又温度がそれ程上昇しなくても、入庫当初は呼吸による有害なガスが出来易く、貯蔵力を減退させるので換気に注意しなければならぬ。湿度が低くなると果実の水分が蒸散し易く、萎び易いの

で、適宜撒水、或は湿つた布切れを吊下げ等の方法で、常に適湿を保つ様に心掛けなければならない。

果実の萎び、即ち重量の減少は、果皮に「サビ」の多いもの程激しいので、貯蔵果としてはサビの多いものは不向である。選果の際によく注意してサビの著しいものは長期の貯蔵に廻さぬようにする必要がある。又、糶殻等の詰物をしたまま長く貯蔵すると、臭気が移つて旨くないので、バラのまま箱詰にして貯蔵し、出荷直前に正規の荷造りにするのがよい。

## 出荷包装について

園芸作物はいくら優品であつても、出荷量或は販売の方法によつて生産者の手取りに大きな差を生ずる。

果物は品質(味)が良く、安ければ現在より消費量がまだまだ増大することは明らかである。味の良いものを穫るには栽培技術の向上が必要であり、小売価格を下げるには生産費の軽減を図る必要があることは云う迄もない。しかし一方に於て生産者価格と小売価格との差が余りにも大き過ぎるともまた事実である。

例えばりんごについて調査されたものを見ると、生産者の手取りが小売価格の三五

〜四〇%、小売者の所得が約三〇〜三五%、荷造り輸送費が約一五%、市場手数料その他が約一〇%内外ということである。このように並べてみて生産者手取りの少な過ぎることに一驚させられる。だからいつて小売者の価格や、市場手数料を勝手に切下げても不可能である。従つて生産者の直接関与している部分で経費を節減し、純益を高めるように工夫しなければならない。

先ず第一は荷造り経費についてである。近年ダンボール箱の普及に伴つて、あらゆる果実の荷造りにこれが利用されるようになった。りんごの荷造りについて従来の木箱と比較してみると次のようである。

市場の仕切値は、従来の木箱換算一箱当り平均三二円程度安いが、荷造経費、運賃諸掛りが節減されるので差引手取額は、普通木箱の場合に比し一箱当平均五〇円強の利益増になつている。即ち、反当一〇〇箱とすれば荷造りの方法を改善することによつて、反当純収が五、〇〇〇円増加する勘定になる。熟慮を要する事柄である。

次に販売を有利に導く為には、共同選果、荷造り及び共同販売を採用することによつて、或程度迄無駄を省き合理化することが可能である。特に本道の如く果実そのものの性質が貯蔵に適するような地方では、協同力によつて一定品質のものを合理的に貯蔵し、計画販売によるのでなければ、従来のような個人プレーでは、到底氣候条件のよい本州の大産地に太刀打出来るものではない。

## 今年の栽培に対する反省

愈々本年も終りに近づいて、物事総てについていえる事であるが、今年一年を振り返つてその欠点をよく反省して置くことこそ、明年の経営を一段と発展させるための礎石となるものである。

即ち、本年の結果状態と花芽の着き方から見て剪定技術に改善を要する点はないか? 薬剤の撒布は適当であつたかどうか? 特に「ダニ類」は一種の薬剤に対して抵抗力を持つようになつたという事実を方々で聞かされる。果して自分の園でそのような傾向が見られるかどうか、若しあるとすれば代替として用うるべき農薬を考えて、時には試験機関に問い合わせる必要も出て来るであろう。使用直前になつて慌てても完全な防除は出来ないものである。

また最近年によつて多発を見る、りんごの「フラン病」、「モニリヤ病」、道南に多発する「ウドンコ病」、或は寒冷地に多発するぶどうの「ネクピヤケ病」等、本年の発生状況から推察して、明年打つべき手段を考えて置かねばならない。

更に密植の害が現れて来ているところがあれば間伐の計画も立てて置かねばならない。或は排水不良のために成果の上らない園がないか等、年が明けて春ともなれば「喉元過ぎれば熱さを忘る」で、前年の苦しい経験も真実味が薄らぐものであるから、反省してその処置を考える好期は今である。



暖地

1 徒長燕麦の刈取

燕麦の徒長は寒害をうけ、むだになるので、年内

に刈取り利用すればよい。ただし低刈りは再生を悪くするため、六〜七刈の刈株高を残し、追肥中耕しておきます。また刈取後寒害により株絶えすることがあるから、新芽の緑化するまでアクタ・切藁またはお古のビニール等で被覆保護することが大切です。堆肥を用いれば肥料効果もあがり一そう結構なわけです。

2 燕麦の堆肥施用

青刈燕麦の株の上から堆肥を着せれば、寒害防止・雑草防止・施肥の三つの効果があり、田畑いづれにおいても必要であることは言うまでもありません。

田圃の簡易整地播のところでは、堆肥施用まえに、中耕し畦を作り、排水を良くして化学肥料を施しておくべきです。とくに簡易整地播の燕麦は、一般に、ペッチ類の生育に圧されがちになりますから、窒素質肥料を多めに施し、燕麦の伸長を旺んにさせなければなりません。

3 カブの収穫

カブは寒さに強いから、必要なときに随時収穫してよいものですが、冬至近くになるとカブは太らないので、十二月中旬に収穫するのが得策です。その際、間作の作物への影響を考えて、一時に全部収穫するか、逐次収穫していくかを決めます。

一時に全部収穫する場合には、根部と茎葉とを切りはなし別々に貯蔵します。つまり根部は排水良好な場所所に六〇〜九〇%の高さに盛り、古藁か藁程でおおい、その上に土を一〇〜二〇%の厚さに着せます。土を余り厚くかけすぎて内部がムレることをないように注意し、また二〜三層間隔に麦稈を立てイキぬきにします。茎葉はサイロに詰めてエンシレージに調製するか、降霜に会わせて凍結させて生育を止め乾燥すると青々と干し上ります。

寒地

自給飼料の作付計画

この一年間をふりかえつてみて、飼料の給与状態は如何だったでしょうか。粗飼料(自給飼料)は十分ありましたか。粗飼料の質は悪くありませんでしたか。乳はよく出ましたか。採算は?

農閑期に、飼料についてもゆつくり反省し、検討を重ねて、明年度の自給飼料の作付計画を立てておきましょう。

自給飼料こそ、飼料代をもつとも軽減できるものであり、自給飼料の計画的な栽培と、その合理的な給与が、酪農収益のカギをにぎっているといつても過言ではありません。つまり自給飼料を上手に作つて、それを年間通して豊富に与え、その中に含まれている蛋白、炭水化物、脂肪あるいはビタミン、ミネラル等を十分に摂取させて、購入飼料をあまり用いずに、沢山の牛乳を搾る人こそ、安いエサ代から多くの純益を得ているわけです。

寒冷地の場合、自給飼料の給与は夏期(5カ月)と冬期(7カ月)とに分けて考え、冬期は貯蔵飼料を食わせるわけですが、乳牛一頭に対して、自給飼料圃の面積は、大体五〇%を標準としています。そして、一般に酪農経営がすすむにつれて、飼料作物の種類を限定し、作付を単純化する傾向にあります。一例をあげてみますと、

夏期 6月〜10月

(刈) 一日

給与量

a 放牧……………混播牧草(一〇) 二六六キロ

b 青刈……………混播牧草(三〇) 一〇〇

又はライ麦、燕麦、玉蜀黍

c 多汁質……………秋まき(五) 二六六

春・秋まき(五) 二六六

d 乾物……………紫かぶ(五) 四二

冬期 11月〜5月

a サイレージ……………混播牧草(二〇) 三三九

又は玉蜀黍

b 多汁質……………家畜ビート(七) 三三三

又はルタバガ、かぶ

c 乾物……………乾牧草(二〇) 五九

夏期は放牧を主体としてこれに青刈、多汁質、乾草をあてえ、冬期はサイレージ、根菜、乾草を併せ給与するわけです。

(一)内に作付面積を示しましたが、夏期に二二%、冬期に二九%、計五〇%となり、また、その下の数字は一日当給与量です。この作付は札幌附近の普通地を用いた場合の一例で、飼料作物の収量は地方、

気候条件、栽培技術等によつて著しくちがいますから注意すべきです。ここでは各作物の収量を一〇%当り

混播牧草(放牧) 七、〇〇〇キ

混播牧草(青刈、乾草) 五、〇〇〇キ

レープ 三、〇〇〇キ

紫かぶ(葉共) 六、〇〇〇キ

家畜ビート(葉共) 七、〇〇〇キ

としております。混播牧草(放牧)はラ

デノクローバー、ペレニアアルライグラス、オ

ーチャードの三種混播。混播牧草(青刈、

乾草)は赤クローバー、ルーサン、オーチャ

ード、チモシーを主体とした多種類混播で

す。従来からの考え方にすれば、この混播

牧草の収量は多過ぎるように思われかも知

れませんが、施肥・混播・早刈の三つを励

行すれば容易に得られる収量であり、実は

ここに作付単純化のコツがあるわけです。

各飼料作物の上手な作り方は来月号(新

年カタログ)等を参照していただくことと

して、単位面積から、できるだけ多くの飼

料を、しかも蛋白成分の多い栄養価の高い

飼料を生産できるようにし、しかも、年間

通してムラなく豊富に給与できるよう勘案

しながら作付計画をいたします。

書きおくれましたが、乳牛の一日の可食

量は、生草で体重の約一割で、五〇〇キの

乳牛なら約五〇〇キの粗飼料(自給飼料)を

食します。

更に、粗飼料の栄養価を調べ、飼料計算を

行ない、搾乳量の多少にしたがつて、濃厚飼

料の量を加減すれば、理想的なエサの給与

体系がえられることとなります。(かねこ)